

2017/07/30 先週のメッセージより

『苦しみの原点～痛みからの解放～』

- 苦しみの原点

人は、人との関わりに於いて様々な痛みを覚える。怒り、嫉妬、落ち込みなど、様々な痛みに襲われる。ところが、その痛みの出所はある一点に集中する。それは、「人を愛せない」ことに集中している。愛せないことが人を苦しめている。愛することに条件を突きつけるから、痛みに襲われる。

例えば、親は自分の子を愛するのに、「頭が良い子」という条件を突きつける。そのため、子どもが悪い成績を取ってくると愛せない。それどころか「怒り」が生じる。それだけではない。自分の子どもよりも頭が良い子を見ると「嫉妬」まで生じる。人が覚える「怒り」や「嫉妬」、これらはまさしく愛することに条件を突きつけることで生じ、人を苦しめる。

そもそも人は神に似せて造られたので、神と同じ「本質」を持っている。それは「愛」にほかならない。「神は愛です」(Iヨハネ4:16)。その愛は、自分の敵でも愛せる愛なので、イエスは次のように言われた。

「しかし、いま聞いているあなたがたに、わたしはこう言います。あなたの敵を愛しなさい。あなたを憎む者に善を行いなさい。あなたをのろう者を祝福しなさい。あなたを侮辱する者のために祈りなさい。」(ルカ6:27-28)

これが「本来の愛」であり、一言で言うと、無条件で受け入れることを指す。ありのままの姿を肯定、愛することに一切の条件をつけないことが「本来の愛」である。ところが人は「本来の愛」ではなく、愛することに条件を突きつけてしまう。そのため、条件に合わない相手は「敵」となり、合う相手は「味方」となり、そのことが人を苦しめる。これを「偽りの愛」という。人の痛みの原点は、まさしく「偽りの愛」でしか人を愛せないことにある。それは、ほかでもない自分自身を「本来の愛」で愛せないことに端を発している。なぜそうなのか、そのことを説明しよう。

- 自分を愛せない

「本来の愛」は、無条件で受容し、ありのままを肯定する。そのため、「本来の愛」の下では、相手が誰であるかは関係ない。敵であろうが味方であろうが、自分であろうが神であろうが、分け隔てなく接することを可能にする。そのため、「本来の愛」の下では、自分を愛せるが隣人は愛せないという話にはならない。そうではなく、自分を愛せるなら、隣人も愛せるという話になる。イエスはそのことを誰よりも知っていたので、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」(マルコ12:31 口語訳)と言われた。

つまり、人を愛せないという場合、それは自分を愛せないことを意味する。条件を突きつける「偽りの愛」でしか自分を愛せないから、人に対しても条件を突きつけるのである。それが「敵」を生み、「味方」を生み、「怒り」や「嫉妬」を生じさせて人を苦しめる。

このように、人の苦しみの原点は人を愛せないことであり、それは自分自身を愛せないことに端を発している。自分を「本来の愛」で以て愛せないから、人も「本来の愛」では愛せない。それが人を苦しめている。



そのため、自分を愛せるようになると、人は痛みから解放される。無条件で自分を愛せるようになれば、条件を突きつけることで生じていた「怒り」や「嫉妬」は消滅し、「安息」に支配されるようになる。この「安息」は、たとえ全財産が奪われても、家族を失ったとしても、病に苦しめられることになっても、自分の死が迫ってきても、決して失うことはない。なぜなら、無条件で自分を愛する「自己肯定」とは、自分自身に起きる患難も全て引き受けることを意味するからだ。自分を愛するという挑戦は、まさに患難を克服する「安息」への挑戦となる。

だから人は、自分を愛する試みを昔からしてきた。誰もが自分を愛そうとしてきた。しかし、自分を愛することの実際を取り違えたために、肝心な「安息」は手にできなかった。代わりに「不安」や「恐れ」を手にしてしまった。その辺りの様子を見てみよう。

● 自分を愛する試み

人は自分を愛そうとしてきた。「自己肯定」を試みてきた。ただその実際は、富、学歴、行い、知識、素敵な服、素敵な持ち物、そうしたもので自分を装い、人から良く思われる自分になることで自分を愛そうとする試みであった。良く思われる自分を演じ、周りから愛されることで自分を肯定しようとしたのである。人はそれを、自分を愛することだと思ってしまった。

しかし、この試みは「現実の自分」を置き去りにし、「別の自分」を愛そうとする挑戦であり、「自己肯定」ではなく「自己否定」の何ものでもない。「現実の自分」を何かで覆い隠し、それを見ないようにしているだけであり、誤った自分の愛し方である。

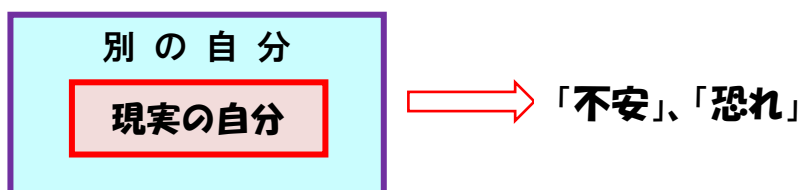
人はそうとも知らず、「現実の自分」を美しいもので覆い隠し、人から良く思われようと「この世の心づかい」(マタイ 13:22)を目指した。それは元より、神よりも人のことを思う挑戦であったので、イエスに、「下がれ。サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思

っている」(マルコ 8:33)と言わしめた。さらにイエスは、この誤った自分の愛し方を次のように評した。

「わざわざだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいです。」(マタイ 23:27)

イエスの言われるように、「現実の自分」を見れば、確かに「あらゆる汚れたものがいっぱい」満ちている。人に対する嫉妬心、怒り、憎しみ、欲望など、罪深い自分がそこにいる。そんな「現実の自分」を、確かに私たちは隠そうとしている。美しいもので隠し、美しい姿を自分の姿として生きている。だがそのせいで、「現実の自分」が暴かれないかと戦々恐々とし、人の目を恐れてしまう。自分がどう思われているかが気になり、日々、周りの目に怯えるしかない。そこにあるのは「安息」ではなく、「不安」や「恐れ」でしかない。

このように、人は誤った仕方で自分を愛そうとした。罪深い「現実の自分」を、人から良く思われる「行い」という着物で隠し、「別の自分」になることで自分を愛そうとした。それが、先に述べた条件を突きつける愛し方であり、「偽りの愛」の中身となる。「偽りの愛」とは「現実の自分」を拒否し、「別の自分」を受け入れることを指す。それが、人に「不安」や「恐れ」をもたらし、人を苦しめているのである。



そうなる、ここに疑問が生じる。どうして人は「現実の自分」を愛せないのかという疑問である。愛せないことの原因を突き止めなければ、こうした「偽りの愛」は終わらない。原因を明らかにしてこそ、真に「愛する」ことへの挑戦ができる。そこで、「現実の自分」を愛せない原因を突き止めてみよう。それには、アダムの時代にまでさかのぼる必要がある。

● 自分を愛せなくなった歴史

その昔、悪魔の悪巧みによって人は罪を犯し、罪によって「死」が入り込んだ。その「死」はすべての人に及んだ。「このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです」(ローマ 5:12 新共同訳)。

ここでいう「死」とは、神との結びつきを失うことを指す。神との結びつきを失えば、人は神に愛されていた自分が見えなくなる。それだけではない。神のみが永遠なので、神との結び

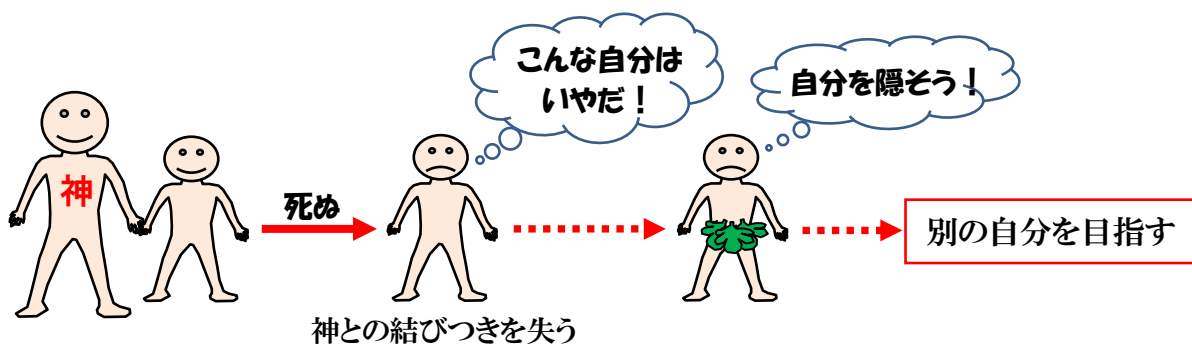
つきを失えば永遠に生きることもできなくなる。つまり人は、入り込んだ「死」のせいで神の愛が見えなくなり、その存在も有限となり朽ち果てる「運命」に突入したのである。人が暮らす世界も併せて有限となり、「滅びの束縛」(ローマ 8:21)へと突入した。

とはいえ、人は永遠なる神に似せて造られていたので、「さあ人を造ろう。われわれのかたちとして、われわれに似せて」(創世記 1:26)、すなわち神の愛が見え、神と共に永遠に生きるように造られていたので、「死」がもたらした「現実の自分」を受け入れることなどできなかった。神の愛が見えない「現実の自分」を、永遠に生きることのできない「現実の自分」を、とても受容することなどできなかった。できないから、人は「現実の自分」の姿を「恐れ」、その姿を拒否する(隠す)行動に出た。その様子が、創世記には次のように描かれている。

「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」(創世記 3:7)

「ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った」とは、永遠なる神との結びつきを失い、自分の姿しか認識できなくなった「死」が入り込んだことを表している。二人は、「死」がもたらした見えるところの「現実の自分」を「恐れ」、その姿を隠そうとする行動に出る。その様子が、「そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った」と綴られている。

この事件から、「現実の自分」を愛さない生き方がスタートする。自分を嫌い、「富」、「学歴」、「行い」、「知識」、「素敵な服」、「素敵な持ち物」、そうしたもので自分を覆い隠し、人から良く思われる「別の自分」を目指そうとする生き方が始まる。



このように、人が自分を愛せなくなってしまった原因は、神との結びつきを失う「死」にあった。ゆえに、「死」を解決しない限り、人は自分を愛せなかった。誤った愛し方の挑戦しかできなかった。実は、自分を愛せなくなった理由はこれだけではない。この話には続きがあった。

● 「罪」との出遭い

人は神に似せて造られた。そのため人の「本質」は神同様、「永遠のいのち」であり、「愛」であった。ところが、神との結びつきを失う「死」が世界に入り込んだことで、この世界は有限の世界となり、全ての被造物が滅びる「運命」を背負うことになった。神との関係も「疎外」された状態になり、神の愛が全く見えなくなってしまった。こうした状態を「罪」というが、それは神に似せて造られた人の「本質」が全く機能しない状態を指す。

当然、神から与えられていた「本質」が全く機能しないことに人は激しく抵抗した。有限となった「運命」に逆らい、何としても生きようとした。神との「疎外」に逆らい、何としても愛される者になろうとした。しかし、生きようとする試みも、愛されようとする試みも、「死」が支配する世界では不可能な試みでしかなかったために、とんでもない副産物に苦しむことになった。

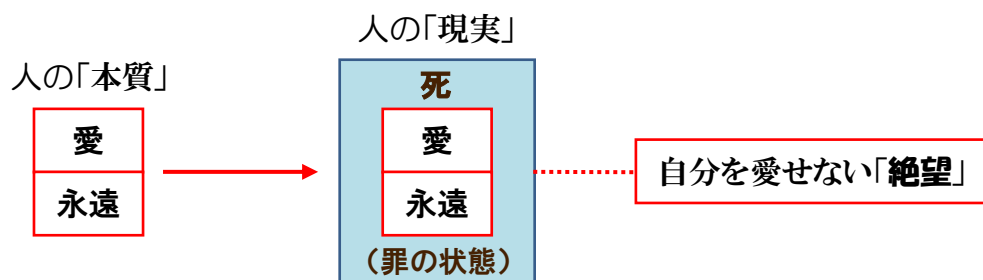
何としても生きようとする試みは、生きるのに必要な富を求めさせた。ところが有限の世界に於いては限られた富しかないの、富の奪い合いが生じたのである。また、愛される者になろうとする試みは、有限の世界に於いては限られた時間しかないの、結果が要求され、愛されるための競争を生じさせてしまった。つまり、生きようとする試みは富の奪い合いを生じさせ、愛されようとする試みは競争を生じさせたのである。言うまでもないが、それが「肉の行い」と呼ばれる「罪」を誘発する。「現実の自分」に対する激しい抵抗が、罪深い自分に出遭うことを可能にしたのである。これがとんでもない副産物であり、人はそれに苦しむことになった。

すなわち、人は「死」に抵抗することで、「罪」というパンドラの箱を開けてしまったのである。「死のとげは罪であり」（I コリント 15:56）。人は「罪」と出遭うようになり、そのことでますます自分を嫌うようになってしまった。そうすると、ますます自分を隠し「別の自分」になろうとする。それに伴い、人との競争はさらに激化し、以前にも勝る「怒り」や「嫉妬」といった「罪」と出遭う羽目になる。そのことがさらに自分を嫌いにさせ、さらなる罪の出遭いを可能にする。まさしく自分を嫌いになる負の連鎖がここにあり、その行き着く先は「絶望」でしかない。

このように、人が自分を愛せない根本原因は神との結びつきを失う「死」にあったが、その「死」が「罪」を生じさせ、ますます人は自分を愛せなくなってしまったのである。こうした理由から、罪を犯す「現実の自分」を何かで隠し、「別の自分」になることで自分を愛そうとする「誤った挑戦」をするようになった。

ならばもう、人は自分を愛せないのだろうか。「真の勇氣」を以て「愛する」というのは、もう不可能な挑戦なのだろうか。苦しみから解放される「安息」は、夢のまた夢なのだろうか。確かに、自力では「死」も「罪」も、どうすることもできない。自力での「愛する」という試

みは不可能でしかない。これでは、「絶望」に転げ落ちるしかない。実際、人は「絶望」というやみの中に落ちてしまった。そんな中、人は大きな光を見たのである。



● 大きな光を見た

自分を「愛する」ことは「死」に遮られ、人にとって不可能な試みでしかなかった。ところがそこに、「愛する」という不可能な試みをやったのけた、「真の勇氣」を持った方が現れた。その名を「イエス」といった。その方には「本当の愛」があった。その方は何と、人から良く思われる「別の自分」ではなく、罪深い「現実の自分」を愛してくださったのである。その方は、わざわざ罪人を招き愛してくださった。

「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」」
(マルコ 2:17)

ここに、人類は光を見た。初めて、罪深い私たちを受容してくれる「本当の愛」に出会った。だが、罪人を愛する「本当の愛」は、この世では「善」とされなかったので、その方は迫害され殺されてしまった。しかし、殺されたことで、罪人を愛する「愛」はまことに「本当の愛」であったことが明らかとなり、私たちは罪深い「現実の自分」を愛せる勇氣を知った。

それだけではない。その方は、殺されたあとに復活された。その方は、私たちは滅びる「運命」からは逃れられない罪深い姿であっても、それでも復活の希望があることを示してくださったのである。やみの中を歩んでいた民は、ここに大きな光を見た。

「やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に光が照った。」(イザヤ 9:2)

自分の姿を拒否し続けてきた民は、自分の姿を嫌ってきた民は、自分を愛せる唯一の道を「イエス」を通して見ることができた。その道はこうであった。

● 自分を愛せる唯一の道

「現実の自分」を愛せなくなってしまったのは、ほかでもない神との結びつきを失う「死」に原因があった。そのため、「死」を取り除かない限り、すなわち神に接ぎ木されない限り、自分を愛することなどできない。さらにそれに加え、人は罪と出遭ってしまった以上、こんな罪深い自分であっても関係なく愛して下さるという無条件の愛を知るようにならなければ、とても「現実の自分」を肯定することなどできない。とはいえ、人は自力で神に接ぎ木されることも、自力で神の愛を獲得することもできない。

そこでイエス・キリストが来られ、神に接ぎ木される道を示された。それは何と、誰であろうと神が接ぎ木して下さるというものであった。だから人の側は、その恵みをただ受け取りさえすればよかった。神の声を聞きさえすれば神に接ぎ木され、死ぬ「運命」であった者が生きる者にされた。受け取りを拒否する者は、そうはいかなかった。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

次に、神に接ぎ木された者が無条件の神の愛を知るようになる道を示された。それは何と、神が一方的に愛するから、人の側はそれを拒まないでただ受け取ればよいというものであった。一方的に愛することの証しに、私たちがまだ罪人であろうとも関係なく、イエス・キリストは十字架に架かれた。

「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。」(ローマ 5:8)

このように、イエス・キリストが示された自分を愛せるようになる道は、ただ恵みを受け取ればよいというものであった。神が無条件で人を接ぎ木し、無条件で愛してくれるから、人の側はそれを受容するだけでよいというのである。それが自分を愛せる唯一の道であり、隣人も神も愛せるようになる道であった。その道を進むことで罪は排除されていき、苦しみを呑み込む「安息」を手にすることができるので、イエス・キリストは人の「光」となった。

ならば、神に接ぎ木される恵みを受容したなら、あとはどうやって、無条件で愛される神の愛を受け取ればよいのだろうか。どうすれば無条件で愛してくれる神の愛を受容でき、自分を愛せるようになるのだろうか。その辺りのことを見てみよう。そうすれば、何をすることが「真の勇気」であるかが明らかになる。

● 自分の愛し方

イエス・キリストを信じている者は、すでに永遠なる神に接ぎ木されていて「永遠のいのち」を持っている。「私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです」(Iヨハネ5:13)。ゆえに、イエス・キリストを信じる者は、あとは無条件で愛される神の愛を受け取りさえすればよい。その方法は至って簡単であり、罪を犯す「現実の自分」の姿を神の前で告白するだけでよい。罪を言い表すだけで、無条件で赦される十字架の愛を受け取ることができる。

「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。」(Iヨハネ1:9)

受け取れば、「こんな私でも愛されている」という事実を知ることとなり、そのことが自分を「愛する」ことにつながる。この体験を繰り返すことで、自分を多く愛せるようになっていく。つまり、多くの罪に気づき、多くの罪が赦されることを知ることで、多く愛せるようになる。

「だから、わたしは『この女の多くの罪は赦されている』と言います。それは彼女がよい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません。」(ルカ7:47)

このように、あなたがどんなに自分が嫌でも、どんなに自分を「ダメな者」と思っても、どんなに自分は生きる価値などないと思っても、そんな思いを強力に否定する方がいる。その方は私たち造られたイエス・キリストであり、私たちが自分の罪深さをどう思おうとも、罪の状態のまま引き受けてくださる。そして、その罪をいやしてくださる。その罪とは、「愛せない」という罪であり、それが人を苦しめていた。

●パウロの証し

パウロは、まさしく罪を犯す自分への「絶望」の中で神にあわれみを乞い、無条件で愛する「本当の愛」を受け取った。結果、罪を犯してしまう絶望的な「現実の自分」を、イエス・キリストのゆえに受容できたことを証しする。

「私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。」(ローマ7:25)

またパウロは、病気を覚え朽ち果てるしかないという「現実の自分」の体の「弱さ」に「絶望」する中、神にあわれみを乞い、無条件で愛する「本当の愛」を受け取った。結果、イエス・キリストの恵みゆえに、絶望的な「現実の自分」の体の「弱さ」を誇る事ができたことを証しする。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現れるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。」(Ⅱコリント 12:9)

こうしてパウロは、罪を犯す「現実の自分」と、朽ち果てるしかない弱い体の「現実の自分」を愛せるようになり、自分を愛せなかった苦しみから解放された。それは、神がそうした「現実の自分」をいやしてくださることを「信仰」で知ったということの意味する。自分を愛するというのは、まさしく「十字架の言葉」を信じることを指す。

このように、「神の福音」は、罪深いあなたを否定し、「別の自分」になれば神が愛してくれるという福音ではない。罪深いあなたをそのまま引き取り、神の愛を食べさせ、「本当の愛」を回復させ、終わりに復活させる福音である。「ダメな者」を「良き者」とする福音ではなく、「良き者」として受け入れ「良き者」としての姿に戻してくれる福音である。「良き者」についた泥を洗い流してくれる福音である。ゆえに、見えるところの「現実の自分」がどうであっても無条件で愛される。責任持って引き取り、いやしてくださる。その愛が、人の中にある「本当の愛」を回復させ、愛せないという苦しみから人を解放するのである。